

眞の労働者文学を きたれる新たなる書き手



九〇年を
ふりかえつて
三里小六年 佐伯 裕子

世の中には、やめでたいこともあります、かな
しいこともある。良いこともあれば、いやなこ
ともある。が、そんなことはよほど大きなこと
でなければ、何年かたっては、すぐわすれられて
しまう。だが、私たち三池の子供は今年のこと
は、一生わすれられないであろう。
このわすれられないことの中で、もつともわ
すれられないのは、いくら世の中を知つていな
い人でも知つている。三池闘争である。

私はその三池争議を、一から十までしつてい
るつもりだ。父は、三池炭鉱労働組合本部の書
記をしているから。

いろいろの報告を聞いてきては、母に話して
いるのをそばで聞いているのです。たまには、
私に話して聞かせ、それにたいしての私の考え
をきいたり意見を聞き、よくわかるようにおし
えてくれるからである。

そのために、私は友たちの知つて
を知つてゐる。だからといつて、そ
していはつたりはしないつもりだ。
三池争議の中では、大学のや兄さ
おじさんたちと、たのしく遊んだこ
が、いやなことも少なくなかつた。
第一に、第二組合というのができ
ちやんとした組合があらわるのに、会社
合といふものをつくつてしまつた。
大人はむろん子供までが、仲が悪く
だ。第二組合ができる前までは、近
かよかつた人も第二へ行けば、第二
てがらりとかわつて、顔を合わせて
らともなく、顔をそむける。
第二にいやだとと思うのは、第二組
三者の人で、第一組合のことを行方
万をすることです。旧とは、以前は
なくなつてゐることですから、第一
もうないといふようにきこえるから
第三に、この闘争の中で、たくさ
者が出了ことです。目玉をえぐりと
片手がなくなつたりした人があります

う寒きこの朝
貯めし銭子は惜みなく酒買いて闊う吾の勞を
ねぎらう
カンパ物資の礼状を書く手もふるえ背振の山
に雪積もるらし

能句  三池の火

宮浦 中村 一徹

スト終えて極月の痰石炭まじる
オーバーのバツチに平和の鳩輝や
初刷の「みいけ」に託す心の火
ねんねこの子に未来あり三池の火
千二百の仲間帰らず年迎う

雜詠

宮浦 永野 草平

三・池鬭争によせて

ピケ小屋の灯下親しき座談会
サングラス掛けて顔（かんば）せ振らせま
起き臥しのピケの電車も虫の宿

人形のもの縫ふ妻と秋灯下
生活のうた

ながくはせじたたがくの由でわれわれは日常接するやがて、数多くの苦しむ、また喜び体験を経てきた。日本の冷感をそしてか、諒めなくとも、政府・官僚のバクロされた醜い姿、マスク、第一組合……などなど、それはわれわれが監視活動などを通じて長く聞ひじいたり繋がりあつて知識じたじこにいたるところが、期間ごとに体の中にたまつたのである。

また、われわれは労働階級の連携の強さを、身にしみるほど味あわせた、その必要をひどく強くしたるものである。

ついで、仲間を敵に売り廻り詫

惹してらつた衝突意識たちを四年たつた。この行動の中から文芸の前途ある本質的な問題を実感として記載していくが、そのためにはかなりうなづかしい。われわれはこゝの闘争を通じて日本文学活動が非常に重要な役割を持つてゐるかのことを、痛切に感じたし、おおならの虚飾的な活動をやりこじたる文学の仲間が、いつの間にか疎遠になって現実をおれおれと見せつけられた。

ただかに激しく決戦的な段階になればなるほど、文芸のもうひとつのものがハツキリした。

じらじら意味ぶらむ、ひとの大
闘争を興奮機として、真に労働者の
文學活動といらものが、その底を
ますます深く、新たな活動が展
開されるものと確信してゐる。
そして、新たな書き手の出現がい
よいよ待たれでしるのである。
なお、前例の新年文書は、今回は
諸般の事情で実現できなかつたが
じくじく組合員の手から音頭を頼り
掲載することとした。

取材の姿勢が少し
滝本さんの句、短
確か、五句それを
感じて、つらしり
る。木下さん、少
なる。田中さん
わきまえた句。
き勝手な感想を述
べく三池の圖いが
ケールが大きかつ
たちとしても、事
由倒され、作品
る次第であり、短
本格の方創作など
べきだう。

（説）

黒い足音を
一一つつかき消そうとし
みんなが温かい血と血で呼び合い
心の焰を燃しつづけながら
一步、一步、あゆみつつける。

この焰は、
どんな嵐も吹き消すことは出来ない。

この力は、
どんな爆薬でもぶつ潰すことは出来ない。

地球のある限り、

幾百里鉱山を離れて暮すとも想ひは常に三泊の空に
日焼けして秋陽の原に輪をかこみ腕組み歌
石炭掘る仲間
ピケ終えて子等と久しく積木組む日焼け手に
築く組織の城を
炭労の指導オルクを送る夜の声湧きゆるゝ暗
重ねて

月夜の
櫻花
四山 清本 春喜 訪

履女の一日の終り落葉焚く
冬日 宮浦 高棕 龍生
闘争はこれからと云う息白く
玉子酒月並なれど有難や
貧乏また樂しからずや千菜汁
坑出する坑夫に冬日なかりけり
芋焼いてくるる子とある夜なべかな
雜咏

歩みつづける

宮浦 高むく龍生

雇女の一日の終り落葉焚く

惊
世
奇

A black and white illustration of a sailboat on water, framed by large vertical characters reading "大正新" (Taisho Shin). The boat is a traditional wooden vessel with a single mast and a sail. The background consists of stylized, wavy lines representing water.

見えぬ、田にたるものの靈験
を授けたハイナミシクジ（氣體）
故てあはぐしく階調調節に佳能
△中尾みのる短歌、五首ともに
念の高まつたそのお詠嘆し
韻れを覺せてこなす。精緻。
清本さんへの四首詰句の「短歌など
城を」五首の結句「譲量など
など少し上すべの感がある
三首目が素直でいい。

歩みつづける
宮浦 高むく龍牛



鎖を引きするような重いものの音が
一つ一つ、この地上から消え失せて行く。
やせ細つた足を引きずりながら、
それらが一かたまりとなつて動き出す。
その足音は、

明日も
一かたまりの焰は燃えつづけ、
今日も
明日も
一歩、一歩ひと塊りの歩みはつづく。
やがて、地球上から、
黒い足音が消え去るまで
一かたまりの歩みはつづく。

履女の一日の終り落葉焚く
冬日 宮浦 高棕 龍生
闘争はこれからと云う息白く
玉子酒月並なれど有難や
貧乏また樂しからずや千菜汁
坑出する坑夫に冬日なかりけり
芋焼いてくるる子とある夜なべかな
雜咏